

創作×ご飯の合同誌

Companio

[カンパニオ]

2017 春号

Vol.5



目次

お酒は好き？ 篠田くらげ

みそひとごはん 原沙良葉

みぞれ粥 古井久茂

甘味探偵と小さい依頼人 巫夏希

創意工夫 日魚ときお

週明けに 河寫レイ

死と祝祭 豆崎豆太

参加者一覧

お酒は好き？

篠田くらげ

《ワイン》

赤い火花を通せば胸も今を盛りと燃え上がる

白葡萄わたしの名前を呼んでくれ

グラスには閉じ込められた泡がありこれから君を忘れていこう

《ビール》

喉を冷やして凍らせる泡ぬしの心を溶かしたい

ビアガーデン初対面からきみが好き

黄金の約束をして生きていくここからずっと遠くへ行くね

《ウイスキー》

琥珀の喩えも古臭くって君は明日にはここを発つ

消しゴムをかける代わりにウイスキー

ウイスキーボンボン君はくれたっけたぶんわたしを好きだったっけ



みそひとこはん

原沙良葉

「食べるということ」

夕飯の時間ですよと呼ぶ声がりフレインする幸福な街

食べる、ということについて考える。物を口に入れて、噛んで、飲み込むのが食べることだ。空腹の時に物を食べるということは、それは例外なく誰にとっても幸福なことだろうと思う。

手の中の食べ物を見つめる。今は手の中にしっかりある。これが、体に入るだけで目に見えないエネルギーが変わる、ということとは思議だ。

お肉に火を通せば色が変わることが、硬かったじゃがいもがゆでれば柔らかくなるのが、色のついたこの水が元は野菜たちであったことが、しみじみ不思議だなあと思う。

食べることを考えると、いつもしみじみ不思議だと思い、不思議なことが、生きることなのだという結論に辿りつく。

不思議なことを繰り返しながら、生きている。食べることを幸福に思う私たちは、それだけで幸福に生きている。

「真夜中のハンバーガー」

夜更かしをするのが好きだ。しっかり睡眠を取らないと辛い体質の癖に、なにかと理由を付けては夜更かしをしたがる。

真夜中には昼間のように約束はない。この5分後に誰かと会うとか、授業が始まるとか、そういうことを考えなくてもいい。まるで自由な時

間がたっぷりあるような、そんな錯覚に陥る。

夜更かしをするとお腹が減る。

寝ている普段とは違って、起きて行動しているのだからお腹が減るのは当たり前なだけで、夜中にキツチンに立って何かきちんとした食事を作るというのも、なんとなくぞつとしない行為だ。

そういう時、私は偶に近所のハンバーガーを食べに行く。24時間営業の店は、昼間とは違う顔の街の中でも、一際こうこうと光を放っていて、私はそこへまるで羽虫みたいに引き寄せられる。カロリーとか栄養とか考えると、夜中のハンバーガーはあまり良くないのだろうとは思うのだけど。でもそのちよつと後ろめたい感覚が、夜中のハンバーガーをますます美味しくする。

食べ終わった後、諸々のことを済ませてしまつて、少しだけ朝まで眠る。

翌朝、目覚めた時に机に残っているのはくしゃくしゃになったハンバーガーの包み紙だけだ。それをゴミ箱に捨てながら思い出すその味は、朝の光りの中では魔力の大半を失つてしまつている。

真夜中にしか発揮されないその魔力を忘れ、私は次の夜更かしの夜まで、昼の陽射しの下を歩く。

やはらかにハンバーガーを頬張ればやがて儚き白の天井

「アイスクリームの冬」

冬になるとアイスを食べたくなるのは何故なのだろう。

氷が好きで、夏は氷菓ばかり食べている。ガリガリ君とか、アイスボックスとか。アイスの実も好きで、スーパ-に寄るたびに買つてしまう。

パニラ系のはあまり食べない。パニラやチョコを食べるのは冬だ。

ふと冬の夜に、アイス食べたい、という気分になる。

それは家にいる時だったり帰宅途中だったり出先だったり様々で。

夜空の下、頬を赤くしながら自転車漕ぎながらサーティワンの明かりを見つたりすると、もう駄目だ。たまたま飛び込んだ店内で、きらきらしいアイスを選んで口に含めば、冷たい空気と冷たい体に、冷たい甘さが美しく溶ける。

夏よりもずっと切実に、幸福な溜息が出るのは何故なのだろう。

高々とアイスクリーム掲げれば冬の迷子のための灯火

「エビと薄桃」

指先にバンドエイドを貼りながらまな板エビの上に初春

誰にでも食べられない物の一つや二つはあると思う。

私はエビだ。どうもあの感触が駄目。あのぷりっとした感じ。そこがいいのに！とよく言われるので、感触が独特というのは事実としてあるのだろう。私の場合それが悪く働いてるだけで。

家族は全員エビが好きで、寿司を食べたり天ぷらを食べたりする時に、何とも言えない可哀そうがるような目で、こちらをちらっと見たりする。そのたびに悔しい。数年おきに、味覚が変わって食べれるようになっていないか、一応確かめるのだが、未だ食べれた試しはない。

それでもあの形は好きだ。ぐうんとした体の形は面白い。進む時にバックするのも独創的だ。どういうルートで進化したらあれが最善だと思ふようになるのだろう。

料理をする時に殻を剥くのも好き。つるつと剥けた時の爽快感。

エビのお皿の前に、私はふと空想する。架空のキッチンでピンクのエビを剥きながら、エプロンの私はいつも春の陽射しの中にいる。刺身、天ぷら、サラダ、パスタ。出来上がった料理を、顔の見えない誰かと楽しく食べる。うきうきした気分と薄桃色のエビ。

しかしながら、目を開いた先にあるエビは、未だに私の喉を通ってくれない。

皿を睨みながら唸るこれは多分、まだしばらくは続くのだろう。

「やわらかなうどん」

体調を崩すと途端に心細くなる。怠い体を布団の中で丸めれば、訳もなく人恋しい。普段は狭い部屋が急に空間を広げる。

目を閉じれば、熱い体は幼い頃の記憶を連れてくる。額に貼られた冷えたシートのむにゅっとした感触。よく慣れた畳のにおい。台所でこととお湯の気配がして、それと同時に母親のスリッパの音が軽やかに響く。その音を聞いて、やっと安心して眠る。熱がある時に特有の変な夢を見て、目覚めればくたくたに煮られたうどんが差し出されるのだ。

具合が悪い時のご飯はいつもうどんだった。一人用の小さな土鍋に、あたたかな汁にゆれる若布、白い麵。それを啜りながら上目使いに見上げれば、母親の手のひらはまだ小さかった私の額をすっぽりと覆う。他愛のない、夢の話をしながら、うどんを食べた幼い子供は安心してまた眠りに落ちる。

布団の中でまどろみながら、うどんを食べよう、と思う。狭い部屋の中で、もう少し、この変な夢が終わったら。いつものように、やわらかなうどんを食べよう。

そうしてまたひと眠りすれば、きっと元気になれるだろう。

ほにやほにやで白くてやわくてあったかいうどんみたいな猫になりたい

「カラアゲパーティー」

我々は宇宙人も歓迎します！山盛りにした唐揚げの皿！

貴方のお祭りご飯はなんだろうか。

うちのそれは唐揚げである。

運動会の定番メニューであり、ご馳走メニューでもある。誕生日や、大晦日や、親戚一同が揃った日の机には、いつも唐揚げの盛られた大皿が鎮座していた。もちろん稲荷寿司とか、ポテトサラダとか、唐揚げ以外にもたくさんあるのだけど、何故か私が真っ先に思い出すのは唐揚げなのだ。

少しだけしょうがの味がするのが好き。特別の好物という訳ではないはずなのに、空腹でくるくる鳴るお腹を抱えて帰り着いた先に唐揚げが待っていたら、それだけでたちまち嬉しくなってしまう。レシビはそれぞれあるだろうけど、唐揚げが嫌いな人なんていない、というのが私の持論である。

それはきつと宇宙人だって同じだ。あつあつの唐揚げが盛られた皿を抱えて、私は誰とだって仲良くなりた。

どうぞどうぞ、これは歓迎のしるしのカラアゲです。美味しいよ。

ハロハロ。

「懐かしい柚」

しとしとと雨が降る日には、無性に柚茶が飲みたくなる。

茶、と言ってもお茶ではない。母親がよく作る飲み物の名前だ。

みじん切りにした柚の皮と実と、氷砂糖とを交互に層にして数か月置いておく。砂糖が溶けきる頃には、とろりとした黄金色のそれが瓶に詰まっている。スプーンでひとさじ、ふたさじ掬った黄金を、マグカップに落としてお湯を注げば、ふわりと柚の香りが鼻を撲った。

かなり甘味の強い飲み物であるせいか両親はあまり飲まないし、購入した氷砂糖は余るわ、一瓶飲み切るのに一年以上かかるわ、といった諸々の理由があるにも関わらず、母は毎年季節になると柚茶を作る。シンクの鈍い銀色に柚の黄色い皮と種が散らばって、薄暗い台所は柑橘類特有の甘酸っぱい香りが広がる。

いつもは思い出しもしないのに、寒い日の雨音に、ふと柚茶が飲みたくなる。

懐かしい黄金。ふわりとたつ湯気と柑橘類の匂い。あたたかな室温から雨にけふる街を眺めて、記憶の中の黄金を手繰り寄せる。

ああ、柚茶が飲みたい。

手のひらにちょうどおさまる大きさの愛しいものの代表として

「あなたと食べるということ」

小さい頃から一人の食事があまり気にならない性質だ。食べるということは個人的なことだと思っていたし、今でもそう思っている。美味しいという感覚を誰かと分け合うのは楽しいけど、別に必要不可欠という

訳ではない。好きな食べ物を見つめて、素敵なお店で、一人でこっそり美味しい、と思うのも楽しい。

大学に入って一人暮らしを経験して、自炊というものをやるようになった。私は自炊が苦手だ。食べるのは好きな癖に、もともと料理が得意という訳ではないので、つい作るのを億劫がってしまう。

せっかく作った料理が無くなってしまふのが寂しい。上手く出来ても食べたら消えてしまう。自炊だと余計にそれが顕著だ。自分で作って自分で食べて、自分で洗って。食べる前と後で何一つ変化がないような気分になる。そんなはずはないのだけど。

そんな訳で料理が苦手だったのだが、実家に帰って家族のために夕食を作るようになって、ふと気が付いた。

自分以外の人に作る料理は、あまり億劫ではないのだ。

まず量が多い。一人分と四人分では雲泥の差がある。ちまちま作るよりどかどか作る方が気持ちとしては楽しい。キッチンの性能の違いもあるかもしれない。コンロの数とか。

それでも、それらの、言うならば物理的理由を差し引いた上でも、誰かに作るご飯は楽しかった。

作った料理に対するレスポンスがあることが嬉しい。リクエストに答える為にレシピを探すのが楽しい。自炊の時にはあまり作らなかつた副菜を、面倒くさい、と文句を言いながら材料をやりくりして作るのが面白かった。

食卓にお皿を並べていただきます、と声が重なることが、私にとっても幸福なのだと思いが付いて、少し驚いた。

食べることが好きだ。美味しい物を、食べるのが好きだ。

食べることが幸福に思いつながら、それでも、食べらるってそれだけでもないんだろうな、と思う。

食べることが好きだ。一人で食べるのも好きだ。誰かと食べることがも

好きだ。

いただきます、と言うたびに、私たちは幸福になれる。

食卓にひとつお皿が増えるたび満たされていくみそひとこはん

みぞれ粥

和伊啓太

ベッドの上で荷造りの音を聞く。ガサツとかパサツとかは、たぶん、捨てる音だ。トトトツと足音が遠ざかって、トトトツと戻ってくる。コンコンとトントンを何回か繰り返したら、それから、ガサツとパサツが続く。

目を開けて、天井を眺める。角に、埃の塊がぶらさがっている。

目を閉じて、僕は音に向かって声をかける。

「何か悪いね、こんなときまで風邪ひいて」

「別にいいよ、いつものことだし」

ガサツパサツ、荷造りの音は止まらない。ガサツパサツと続く。止まらない。

「いろいろと悪かったね」

「もういいよ、そんなこと」

過ぎたことだから、これっきりだから、こんなことはそんなこと。たぶん、そういうこと。

トントンと音がして、トトトツと足音が遠ざかる。コン、トトトツ、トントン、カンツ、カチツ、それから、トトトツと足音が戻ってくる。

「忘れ物はないと思う。何かあったら、捨てちゃってね」

目を閉じたまま「わかった」と答える。それからすぐにカチャツと音がした。

「カギはここに返しておくから。テーブルの上ね」

ガタガタという音と共に、トントンという足音が遠ざかる。ガチャンと音がして、部屋の空気が揺れる。

「じゃあ、もう行くね。ばいばい」

ガチャンと音がして、また部屋の空気が揺れた。

頭が水風船みたいになった気がして、少し持ち上げて、軽く振る。別にちゃぽちゃぽという音はしない。目を開けて宙を眺める。糸屑のような埃が流れていく。少しだけ息を吸う。そのまま体をゆっくり起こす。冷蔵庫のブーンというファンの音が大きく聴こえる。

テーブルに視線を向ける。タオルに包まれた、隙間から土鍋が見える。鍋をタオルで包む保温方法は僕が教えた方法だ。

立ち上がって、茶碗とスプーンを持ってくる。テーブルの上のタオルをめくる。タオルに包まれていた土鍋はまだ熱い。その土鍋のフタをタオルごしにつかんで開ける。やわらかく香る湯気がこぼれる。僕が体調を崩すと作ってくれた、いつものみぞれ粥だった。

甘味探偵と小さい依頼人

巫夏希

1

甘味処『味庵』。

和菓子が美味しい甘味処である。

おすすめは餡蜜、饅頭、銅鑼焼きなど数多い。

そんな甘味処の一角に、座席に腰掛けるひとりの女性が居た。

嫌でも人目を引く赤いスーツ、その中にある白いワイシャツは二つほどボタンを外しており、とても際どい格好になっている。少し屈めば胸が見えてしまうくらいだ。肩まで届くくらいの長い髪は異常なほど艶やかだった。瞳も燃えるように赤く、見ているうちに吸い込まれ

てしまいそうになる。

プロポーションもまたモデルめいた感じとなっており、背も高い。どちらかといえば美人の類に入るのだろうか、しかし彼女が吸っている電子タバコとニヒルな笑みは、どこか人を近づかせない感じとなっていた。

癒し系というよりも居るだけでヘイトが溜まりそうな感じ。それが万人の持つ、

その女性に対するファースト・インプレッションだった。

「仕事が無い……！」

女性の名前は秋山夜音。探偵である。

さまざまところで探偵をする彼女だが、最近暇なのである。

理由は彼女自身が持つポテンシャルの高さ。

彼女は――カミサマを見ることが出来る。それによってかつてカミサマを殺す手助けをした

こともある。結局はカミサマを殺すことになってしまい、

それによって大きな争いになることもあった。だが、結果として彼女は生きている。外の世界から彼女を引き抜こうという一派が居たが、彼女はそれを拒否して今もここに居るのであった。

「おい、いつまで話しているんだ。この作品の主演は私だろ。そろそろ私の一人称にさせる、馬鹿神」

……主人公にそう言われたので、そろそろ主役交代と行こう。

さてさて。

胡坐をかいて天から言葉を紡ぐだけのカミの言葉はここまでだ。こいつの言葉でストーリーを進行させたいのなら、とつくにUターンしちまったほうがいいぜ。でないと、もう手遅れになるからね。

ちなみに私が今食べているのは味庵一のスイーツ（と私が豪語する）餡蜜だ。白玉と餡子がたっぷりと入っているスペシャルメニュー。私が入頭を働かせるためにはこれくらいの糖分を摂取しないとやっていけないというわけ。まあ、いずれにせよ、このメニューを食べていたら糖尿になるのは間違いないだろうね。私みたく、脳にエネルギーを使う人間じゃなければ。

……それにしても、今日の餡蜜はちよっとおかしい。ずっと食べてきたから解っているのだ。この餡蜜が少々おかしいってことを。今日の餡

蜜は甘さが控えめじゃねえか？ 特に餡子とか
——なんてツツコミを直ぐに入れる。普通なら
無神経なことなのかもしれないが、私はそれを
平易にこなす。誠意こめて作った人はがっかり
するかもしれないが、そんなこと知ったことで
は無い。誠意をこめて作ったのなら、コミット
メントも受け取るべきだからな。

「そうかねえ？」

白髪交じりのおっさんはそう言った。店主だ。
普通に甘いものを作るよりもコーヒーを淹れて
いるほうが似合いそうだがここのオーナーであ
ることは何ら間違いない。

「そうだ、餡子に砂糖入れるだろ？ あの量を
削ったんじゃねえの？」

「そんな削った覚えはないけれどなあ……。お
前さんが言うのなら確かに甘さが控えめなのだ
ろう。なに、そんな日もあるさ」

呟いて、店主は再びグラスを磨き始める。

……まあ、そんなことはどうだっていい。

そんなことより依頼が来ないということにつ
いて。それについて考えねばならない。場合に
よっては今日のコーヒー代だって払えない可能
性も微かに浮上する。今財布に入っているのは
僅か五百四十円。ずっとここに居るから解らな
かったが、それにしても金銭感覚が崩れちまう。

「そうになったら夜音ちゃんにバニーガールでも
して客寄せしてもらおうかなあ。いわゆる『身
体で払う』というやつ。一度言ってみたいセリ
フだったんだよねえ」

白髪のいい年した爺が何を言ってやがる。

そう言って私はコーヒーを飲み干した。

カランコロン、入店を知らせる鈴が鳴ったの
はその時だった。

そこにいたのは、小学生だった。

いや、もしかしたら小学生ではなく、小学生の風貌をした中学生かもしれない。……なぜそこまで具体的に特定できなかったかと言えば、それ程にその小学生の雰囲気……儂く見えたからだ。

「ここに……探偵さんが居ると聞いてきました」

お、探偵だって？

ということは私の出番か。

「あいつが探偵だよ。どう転ぶかは私にも解らない。お前さんの交渉術次第であいつは首を横に振るか縦に振るかが決まるぞ」

「まあ、報酬だな。いくら出す？」

内容よりも報酬を気にする探偵、

それが秋山夜音という女性だった。

裏を返せば、報酬さえ良ければどんな内容でもやってのける超人探偵。

それが私という存在。

なんつーか、かなり美化しているかもしれないけれど、それでもマイルドに言っているほうなんだぜ。だって、私は私であって秋山夜音は秋山夜音だからな。

小学生は私の言葉にたじろぐが、それでも話した。

「未だお年玉の残りがあるから……一万円くらいだったら」

「駄目だな。そんなもので私を動かすのなら無理だ。せめてその十倍は持ってきてほしいもんだよ」

そう言って私は餡蜜の残りを食べ始めた。わーい、餡蜜美味しい。最近はそんなIQが下がるものが流行っているらしいが、私はそんなもの知ったことでは無い。ああ、知らないというわけでは無いぞ。そこだけは言っておこうか。

「せめて、話でも聞いてよ」

話を戻すことにしよう。

小学生はずっと私を見て、それでも私に話を聞いてほしい、と言った。あれほどつつけんどんにしたのに、まだ話を聞け……と。まあ、別に構わないが。

「但し条件がある。……もしその話がつまらなかつたら、お前の持つ一万円を払え。相談費用だ。安いもんだろ」

それを聞いても店主は態度を崩さない。

小学生はそれを聞いて、ゆっくりと頷いた。

そして、小学生は話を始める――。

3

僕の小学校には、ある都市伝説があるんだ。

学校だから都市伝説じゃなくて、七不思議の一

つ――と言ったほうが正しいのかもしれないけれど、『出る』んです。

出る、って何が――って？ それは簡単なことですよ。

出ると言えば、アレしか無いじゃないですか。幽霊ですよ。

校門から見えた校舎に、ふよふよと浮かぶ人魂。

サッカー場に居る人魂。

音楽室から聞こえるピアノの音色。

職員室から聞こえる笑い声。

「……どれも、どれも恐ろしいものばかりとは思いませんか？」

僕はそう言い放つと、目の前に居る探偵は一笑に付した。

そして、僕を睨み付けるところ言いつけた。

「つまらないな。それは、はっきり言って」

「……え？」

「つまらないな、と言っているんだ」

まさかこんなつまらないとは思ってもしなかった。

「……何でそんなことを」

そんなことを、というか。何も気付かなかつたのだろうか。まあそれについてはどうだっていいだろう。お前がどういう意味をもってその発言をしているか、きっと誰も分かっちゃいないだろうし、分かってもきっとお前には伝えなはずだ。そうであるはずだ。それが人間の優しさだからだ。

「言ってしまうえば、それはすべて人間によるも

のだ。幽霊でも何でも無い。校門に浮かぶ人魂は懐中電灯の光だろう。サッカー場も同じだ。

音楽室は先生の練習、職員室も同じく。そう考
えればすべて道理がつく。どうだ、この世はそ
ういう科学ですべて説明がつく。裏を返せば…
…、オカルトは存在しないということだ」

「何を言うんだよ！」

少年は声を荒げる。

しかし私はそんなことどうだっていい。

真実を告げただけに過ぎないのだから。

「……とにかくもう私は話を聞かない。ここま
でだ。まあ、話はつまらなくなかったから、一
万円は払わなくても良いぞ。手間賃も考慮して
無料にしてやろう。それでいいか？」

「何を急に……！」

そう言いつつも、少年はもう何も言いたくな
かったらしい。あつという間に、少年は玄関か

ら出て行くのだった。

5

後日談。

というよりもその直ぐあとの話。

私は餡蜜で口の中が甘くなっていたのでコーヒートをたしなんでいた。コーヒーは旨いからな。何にでも合うぞ。素晴らしいとは思わないか。「……何で彼にほんとうのことを言わなかったんだい？」

店主はそう言って私に笑顔を送りつけた。

「何を言いたいんだ？」

「だって、彼は……もう死んでいるんだろ？」

誰も居なくなつたから、簡単にオチをばらまいたな、このおっさん。

そうだ、そうだよ、その通りだ。

あの小学生は幽霊だ。なぜそう分かったかといえ、足が無かったからな。だから私は足に関する表現を出さなかったはずだ。気付かなかつたとは言わせないぞ。

幽霊ならば人魂だつて見るだろう。別に珍しいことじゃない。オカルトの範疇には入らない話かもしれない。

だが、幽霊も死んだ後すぐはあまり自分が死んだと認識しないらしい。知り合いの伝承研究家擬きから聞いた話だけれど、まさかそれについて身をもって知ることになるとはね。

「僕も初めて見たけれど、幽霊ってあんなに人間らしく見えるんだね」

「そりゃ、同じ人間だった存在だからね。じゃ、マスター、お代はつけといて」

「そんな話をまともに受けていたら、うちはと

「つくに破産してしまうよ。さっさと少しでもいいから払ってはくれないものかね」

「そいつは出来ない相談だ。そうやって私は店を出て行くのだった。」

終わり

創意工夫

日魚ときお

「チアシードの見た目が苦手」と告げたところ、「じゃあ大丈夫な見た目ならいいのね？」と返事がきた。

その後、彼女が作ったのはチアシードを練り混んだクッキーだった。これならほとんど見かけは胡麻だ。なるほど、と僕は一枚噛み砕いた。

彼女は料理もお菓子作りもとても上手だった。

少し太ったと言ったら、ヘルシー料理なるものを作ってくれるようになった。

ラーメンの麺を糸こんにゃくに。ハンバーグの半分は豆腐。味はほとんど変わらない。

食事は大事よ、楽しく食べましょう？ダイエットも工夫すればどうにかなるわ。食べないなんてダメよ。何事も工夫しだい。工夫しだい。

そう言って食卓に沢山料理を並べていたのが先週。

今僕の目の前には、無機質な白い彼女の骨壺がある。

冷蔵庫にはお菓子のタネが入りっぱなし。作り手がいなくなつて材料だけが残つてゐるなんて滑稽だ。僕はこれが何になるのかさっぱりわからない。

がらんとしたりビンゴのそこかしこに、彼女のかけらがたくさんある。

置き去りのペアカップ、クマ柄のひざ掛け、風呂あがりについていたクリーム・
・・。

「それで、人形を？」

目の前に座る初老の男は、ゆつくりと頷いた。

彼は精巧なオートマータ（機械人形）を作る人形師だった。

オートマータはその性質上大量生産ができない上に高額だが、彼の作る人形に虜になるものは多く、購入希望の声は絶えない。特に食事をテーマにした人形は、彼の代表作となつている。

今回うちの小さな雑誌の取材に応じてもらえたのは、奇跡に近い。

「もちろん彼女をそのまま再現することはできません。けれど、そのちよつとした仕草や、ふとした眼差しを、写し取ることはできる。全ては工夫しだい・・・」

そう言う彼の隣には新作の人形が鎮座していた。

彼の「食事ドール（ファンからはそう呼ばれている）」は小さなお菓子であれば実際に食べることができる。しかしそれは人形の動力源になるわけでもなく、ボディに収納されたダストボックスに溜まっていくだけだ。

血にも肉にもならず、ただ「食事風景」を鑑賞するためだけに作られたその人形は、究極の贅沢品として界限での人気は高い。

「動かしてみましようか」

そう言つて彼は人形に手を伸ばす。

コトりと小さな音がして、ゆつくりと人形が動き出す。

食品をただただゴミにするだけの、その優美な仕草。

ぱきり。

人形の白い歯が、小さなクッキーを噛み砕いた。

週明けに

河馬 レイ

お粥を作るたびに思い出すことがある。あれは本格的な春を迎える前の、暖かくなったかと思えば、また寒さがぶり返す肌寒い一日だった。花粉はもう飛んでいるというのに春はなかなか来なくて、わたしは酷い風邪をひいたのだ。このところ続く寝不足が祟ったせいか、なんとなく頭がすっきりとしない。それもあの日と同じだった。

熱にうなされていたせいか、わたしは悪夢の途中で目が覚めた。内容はよく覚えていない。なにかに追い回されていたような気がする。いったい何時なんだろう。カーテンから差し込む光の色や深さからすると、たぶん午後四時くらい。とりあえずわたしの脳はそれなりに働いているようだ。

三日前から続く熱は三十九度をいつたりきたりで、わたしの体はまるで真夏に放置された車内のダッシュボードのようだった。水分は適当に摂ってはいるけれど、お腹には丸二日間何も入れてない。食欲がないわけではないけれど、キッチンに立って何かを作るとか、そういう気力は一切ない。カップラーメンは食べる気がしないし、近所のコンビニでレトルトのお粥でも買っておけばよかった。普段は買い置きがあるのに、こんな時に限って切らすなんて、わたしの危機管理能力はさほど高くないようだ。

今週は月曜日から体調がイマイチで、なんとなく料理をする気にならなかったから、熱が出る前の日に、最後のひと袋となったレトルトのお粥と、冷蔵庫にあった卵を目玉焼きにしたものを食べてしまったのだ。なぜ卵粥にしなかったのか。だって、レトルトパックを別の鍋に移し替えて、その中に卵を溶きほぐして加えるなんてプロセスを考えるのが面倒だったから。お粥はお粥で温め

る。卵はただ単にパカッと割って、フライパンに落としてしまえばいいじゃないか。

ということでそんな食べ合わせとなったわけだ。なので残念ながら、お粥はもうない。

週末近くに会社を休むのはほんとうに嫌だ。木金を休めば土日があるから、体を休ませるのには都合がいいのはわかっている。でも、同僚や上司には四連休と取られてしまう。さぼってどこか旅行にでも行ったんじゃないかと思われるのが一番癪に障る。もちろんわたしの体調が芳しくないというのは、なんとなく周りには伝わっていたとは思っただけだ。

熱でぼんやりしている頭であれこれ職場のことを考えていると、枕元のスマホが震えた。LINEだ。

しおりちゃん、今夜どうする？

中山さんからだった。彼女とは一か月も前から今夜会う約束をしていた。いつも会った翌朝に、次に会う日を決める。だから前回会った日から、もう一か月が経ったことになる。

熱が出ちゃった。ごめんね。

中山さんとの出会いは、以前勤めていた会社の打ち上げパーティーだった。大盛況だった二次会の終わり頃には壁の花になってしまっていたわたしは、その中でも浮いていたように思う。わたしはいたたまれなくなって、話し相手を探そうとあたりを見渡した。そしてそこに、会場の隅ですらりと佇んでいる中山さんを見つけたのだ。身内話で盛り上がっている会場の空気とははつきりと違う何か。どこか浮世離れしていて、そこだけがやけに清らかだ。わたしは吸い寄せられるように思わず声をかけた。

「あの、うちの会社のかたじやないですよね？」

「ゲストで呼ばれたんです。ライターとしてこのプロジェクトに関わってたから」

「あ、そうだったんですか。わざわざ参加してくださってありがとうございます」

「はい」

「あ、お名刺…ナカヤマ…コウ？」

「虹って書いてコウって読むんですよ。女性にしては珍しい名前だから、すぐに覚えてもらえるんです」

中山さんの声はやや低めで、語尾に特徴があった。それがどこかくすぐったくて、もっと話を続けたくなった。ただその声が聞きたくて。

「お！こーちゃん！こんなところに引っ込んでないで、こっちこっち！」

そこへいきなり営業の田中さんが割り込んできた。

「その名前で呼ばないでよ。恥ずかしいなータナピー」

(タナピー?)

営業の田中さんは屈強な体格の体育会系強面男で、どう考えても「タナピー」とは呼べない見た目をしている。

「こーちゃんこそ、そのタナピーはよせよ！」

どうやらこのふたりはどこかで繋がっていたらしい。中山さんがこーちゃんと呼ばれている世界があるらしいということに、少しだけもやっとした気持ちが残った。

「八木さんもこっちにおいでよ。こーちゃんこっちに連れて来て！」

普段強面の営業タナピーは、嬉しそうな顔をしてチームの輪の中に戻っていった。

「わたしをダシにして、八木さん目当てだな、あいつめ……」

わたしは中山さんの独り言を聞かないふりをした。そして中山さんも、自分の言ったことを知らんふりした。わたしの名字はあっさり中山さん

にさらわれてしまい、わたしを見つめる中山さんの瞳がいつそう深くなった。

わたしの下の名がさらわれたのは、中山さんに初めて会って三回目の夜。その夜から、わたしたちは月に一度だけ会う間柄にあった。特に決まりはない。なんとなくそうなっただけ。なにも求めないし、なにも求められない。わたしたちには、その夜しかなかった。

また枕元のスマホが震えた。今度は通話のほうだった。

「ねえ、しおりちゃん。熱って？今何度？」

中山さんはいつもいきなり会話を始める。

「ん……三十九度前後」

「ちゃんと水分補給してる？食欲は？食べてる？」

「お水は飲んでる。食欲はあるけど、もう食べるものがあんまりない」

「今冷蔵庫の中にあるものは？」

「卵一個と、お水と……」

「ああもういいよ。今から行くから」

「え？」

「今から行く。二回だけだけ行ったことあるから大丈夫。冷蔵庫、サイズ小さかったの覚えてるからあんまりたくさんは買っていかないけど、今からスーパーに寄って、それから行く。ドアのチャイムが鳴ったらわたしを入れてくれるだけいい。それだけはお願いな」

「え？え？ちよつと待って、部屋汚いし、いろいろ、え……あ……」

わたしが慌てている間に中山さんは（勝手に）通話を終わらせてしまった。関係を持ち始めた頃、確かに二回だけここで会ったことがある。そのときは前日に年末の大掃除のごとく掃除・整理整頓を終わらせたから、翌日の夜に会う頃にはくたくたになってしまったのだ。だからそれ以来、ここで会うことはない。ずるずるの関係にするの

も嫌だった。わたしと中山さんが重なる部分はたったひとつでよかった。そしてわたしはそれを大切にできなかった。なあなあな関係なんて欲しくなかったから。寝る前に歯を磨くとか、脱いだ服を洗濯機に入れるとか、そんな生活の一部を共有するなんてことはしたくなかった。だってそれがなくなつた時のことを考えるのはつらすぎるから。

中山さんがまたこの部屋に来るなんて。考えるだけで体が熱くなる。あの夜を忘れたわけじゃない。いやそうじゃなくて、わたしは今、熱があるのだ。ややこしい。もうなにがどうなっているのかわからない。わたしはなにと戦っているの？ そうこうしているうちに、わたしはまた夢の中に落ちていった。

ピンポーン。

うとうととまどろんでいる最中にドアチャイムが鳴った。一回押した後、コンッ・ココン・コ

ン・コンのリズムでドアをノックする。ああ、これは中山さんだ。確か前回もそうだったと思う。彼女はそういう遊びが好きだった。

「わー、しおりちゃん！つらそうだねえ……」

玄関のドアを開けるなり、中山さんはわたしの額に自分の額を当ててきた。

「こりやダメだ。寝てなきや。今からお粥を作つてあげる。卵も買ってきたから卵粥だよ」

そういって、スーパ一の袋をふたつキッチンカウンターに乗せた。

「えっと、困る。中山さん……」

「はい、しおりちゃんは寝るー」

玄関から抱きかかえられて無理やりベッドに戻される。反抗する体力も気力もないわたしは、ベッドの中でしおらしく丸まった。キッチンから、冷蔵庫のドアを開けたり閉めたりする音や、鍋を取り出す音など、様々な音が聞こえてくるが、熱に侵された耳には、その音もぼんやりとしか聞こえなかった。この部屋で、自分以外の他の誰かが

出す生活音を聞いたのはいつ以来だろう。引越して半年経った頃に母がいきなりやってきて、変な男と同棲していかどうかをチェックされたことがある。幸いわたしはひとり暮らしを満喫していたし、女友達を含めて誰とも共同生活をする気もなかった。そんなチェックは少しも怖くはなかった。なのに今、中山さんがキッチンに立っている。というか中山さん、お料理できたの？

「よしと……待ってる間はしばらく手が空くから、適当にお掃除とか、お洗濯とかしておくれ」（ええ？やめて……）

「まだ熱は下がらないだろうから、おとなしくしてるんだよ」

（だからお掃除とかしなくていい）

「大人しく寝てないと、いたずらするぞー」

（だからそういうことは言わなくていいから）

中山さんがIKEAのランドリーバスケットいっぱい洗濯物を洗濯機に入れる。彼女が洗濯表示のタグを確認する姿は、なかなか見られないと

思う。下着は洗濯ネットの中に、おしやれTシャツは裏返して表面が傷まないように。やけに手際がいい。それは、わたしが着ている服を脱がす手際の良さに似ている。このひとはいったい何人の女のひとの服を脱がしてきたんだろう。そしてその姿に、悲しいほど生活感を感じないのはなぜだろう。このひとは、なぜこんなにも生活感がないんだろう。

「しおりちゃん。わたし、今晚泊まってくから」

「うつつちゃうよ」

「わたし、結構頑丈にできてるみたい。熱は出ないの。いつも」

「寝るとこないよ。ベッドと一緒に寝られないもの……」

「ここでもいいよ」

「そこってリビング……床は痛いよ」

「平気。しおりちゃんは今晚がきつと山場だから。それを過ぎたらきつと大丈夫だから」

洗濯の次は掃除らしく、洗濯機の脇に立ってかけてあったクイックルワイパーを見つけて静かに床を乾拭きし始める。髪の毛とか落ちているんだろ
うなあ。そんなの見られたくない。だけど中山さんはそんなのはお構いなしで、まるで瞑想をしているかのような表情で、クイックルワイパーをスイスイさせている。

「そろそろ小鍋の中の様子を見てみよう。ちょうどいい頃かな」

シンクで一度手を洗い、小鍋の中を見ている中山さんは、まるで理科の実験をしてるような佇まいだ。

「できた！これから卵を溶いて入れるだけだよ。

しおりちゃん、もうすぐ食べられるからね」

そういえばさつきから出汁の匂いはするし、お腹はきゆるきゆるっていう音を立てるしで、わたしの体は食べる気満々らしい。中山さんが卵を割り、ボールで溶いている音がする。カシヤカシヤという音のリズムが心地いい。

「どうかなーまずはひとくち食べてみてからお塩を振るかどうか決めてね」

甲斐甲斐しく中華スプーンでお粥をひとくち分すく、わたしに食べさせる。

「おいひい！」

「どうする？お塩振る？」

「うん。汗いっぱいかいたから塩分摂らなきゃ。お塩かけてください」

「おっけい！」

このひとの笑顔が好きだ。子供の様に笑う笑顔が好きだ。このひとはきつと、どこか欠落している。いつかどこかで大人になり損ねて、でもいつかどこかで大人になる術を覚えなおした。そうだなきやこんな笑顔はできない。そしてこんなひとはきつとどこかで、皆の知らない場所で密かに泣いているのだ。わたしも知らないところで。

食べ終えたわたしの体をベッドに寝かせると、中山さんはタオルで体を拭いてあげるねと言った。わたしはさすがに恥ずかしかったので、自分

でするからあつちを向いてとお願いしなければいけないかった。ちえつといういたずらっぽい声を上げると中山さんは食べ終えた食器をキッチンまで持って行って、その帰りに蒸しタオルを持ってきてくれた。

「もうちよつと寝るといいよ」

「うん、そうする。さっぱりしたから気持ちいい」

「よしよし。わたしはあつちで原稿を書いているから、なにかあつたら声をかけてね」

「ノートパソコン持ってきたの？さすがノマドワーカー」

「聞こえはいいけど、ただ単に、ピンポーンフリールンライターなだけです」

「ふふっ……原稿ががんばってね」

「おっけい！」

かたかたというキーボードを打つ音を聞きながら、わたしはぬるま湯のような夢の世界に落ちて

いった。熱のせいで変な夢を見ないといいなと思っただ。

ほんの一瞬だけ夢を見ていたような気がする。

今度は悪夢ではなくて、誰かに呼ばれた声が出て目が覚めた。

「中山さん、呼んだ？」

「呼んでないよ」

「そう……」

「呼ばれた気がした？」

「うん」

「ちよつと起きる？もう七時だよ」

その瞬間にタイミングよくわたしのお腹がきゅるきゅると鳴ってしまった。

「お腹減った？」

「そうだね……またお腹が空いた」

「よしよし、じゃあさっきのお粥をあつためてこようね」

中山さんはうれしそうにそう言うと、ついさっきまで格闘していたであろうノートパソコンをほいっとテーブルに置いて、キッチンまで歩いていった。

本当のことを言うと、誰かに看病してもらうのはあまり得意じゃない。弱っている自分の姿を誰かに晒すのは恥ずかしいし、なにより自分がどんなダメになってしまおうような気がするのだ。中山さんがこんなに甲斐甲斐しいひとだとは思っていなかったし、しかもこんなに上手だなんて。わたしはなぜか苛立ってきた。

「中山さんは、看病慣れてるんですね」

「おや？敬語ですね？」

「そういうことじゃなくて」

「んー……やっぱり誰かが熱を出して動けなくなっちゃったら心配するんじゃないの？」

「そりゃそうだろうけど……やけに場慣れしてるなって思っただんです」

「どうしてだろうねえ……」

中山さんは他人事みたいにそう言うと、中華スープでお粥をすくってわたしに食べさせてくれた。生活感なんて微塵も感じさせなくせに。自分自身にはまったく興味がなくせに。なのにくせに。中山さんの過去には興味はないけれど、彼女の指先はたくさんのひとの熱を知っている。

「これ、お米から炊いたの？」

「え？違うよ。うちから冷凍ご飯を持ってきたの。お米から炊いてたら時間かかっちゃうもの」

「じゃあそれって『雑炊』じゃない？」

『雑炊』って、鍋の残り物に、ご飯を入れるって感じじゃない？」

「でも、お米から炊いたのをお粥っていうんじゃない？」

「それってしおりちゃんの大事なことなのか？」

「えーっと……だって一応違いとして認識しておきたいかなーって」

なんとなく責められたような気がした。そんなことどうでもいいじゃんって顔をされて、わたしが引いた境界線をバカにされたように感じたのだ。

だってわたし、中山さんがわたし以外と会っている女のひとのことなんて知りたくないし、ましてや男のひとの可能性だってないわけじゃないし、中山さんのことをこーちゃんって呼んでるひとがいるってことだって知ってるし、それが田中さんじゃないってことだって知ってるし…そのひともこんなことしてるの？ そうなの？ わたしには違いが必要なの。違いがないと困るの。わたしは…わたしは…わたしの立ち位置を知りたいの。わたしはあなたの月イチの女でいい。月に一度だけ会って、セックスして、また会おうねって言うて、それでおしまいにしたいの。生活感とか、そういうのは嫌なの。わたし怖い。もっと会いたい、欲しい、誰にも盗られたくない、誰にも会って欲しくないなんて年がら年中考えているような

女にだけはなりたくないの。なのに熱が出て寂しくなって、そんな時にあなたが来てくれて、甲斐しくお世話してくれるなんて…わたし、どうしたらいいの？

「ねえ、しおりちゃん。今食べてるご飯からできているものはおいしいの？ おいしくないの？ わたしはそれだけが知りたいよ。わたしにとって、それが雑炊とかお粥とかどうでもいいの」

「おいしいよ。おいしいけど、わたしにとってそれはちょっとだけ大事なの。どうでもよくはないの」

「わたしは、しおりちゃんが元気になってくれたらそれでいいよ」

「うん……」

「熱、上がっちゃうよ？ 今、怒ったでしょう？」

「うん……」

「だめだよ、怒っちゃ……」

「うん……」

「だめ……」

「ん……」

（わたしは雑炊よりお粥よりしおりちゃんが食べたい）

（うつつちゃうね）

（うつるね）

週明けの月曜日にもう一日だけ休ませてもらって、わたしは火曜日から出勤した。中山さんは日曜日の午後にはもう帰っていったし、洗濯物も洗い物も中山さん済ませてくれたので、わたしには何もすることがなかった。月曜日は一日中中山さんのことを想った。そして夜になる頃には、彼女との別れを決めていた。

中山さんはウィルスみたいなのだった。わたしの中に入ってくるだけでは足りなくて、すべてを機能停止させるひとだった。そしてなにより罪の意識がなかった。いや、そうではなくて、わたしが予防線を下げ続けたせいなのかもしれない。

中山さんがもつと悪いひとならよかった。わたしが風邪をひいても見向きもしないような。都合のいい時だけ呼び出して、ことに及んだ後はすぐに帰ってしまうような。そしたら憎めたのに。憎んで別れを切り出した方がどんなに楽だろう。あなたなんか大嫌いと、あなたみたいな酷いひととはもう一緒にはいられないと言えたらどんなに楽だろう。

翌月にわたしが別れを切り出した後の中山さんは、深く心臓にまで達した傷に気づかないようにして、ほんの少しだけ微笑んで、頭をぼりっと掻いた。

「そっか……」

「元気でね」

「うん……」

もうすぐ雨が降り出しそうな、そんな顔をした中山さんを見たのは、それが初めて最後だった。

最寄駅を降りての帰り道、わたしは人目をはばからず涙を流した。悲しいはずなのに、なぜかク

週明けに

ツクパッドでお粥の作り方を検索しようと思っ
た。家に着くとさっそくグーグルの検索窓に「お
いしい お粥 作り方」をタイプした。トップに
出てきたリンクをクリックすると、レシピがずら
っと並んでいた。ひとつずつ開いてみると、そこ
にはご飯から作ったもの、お米から炊いたものが
混在していた。わたしは「ばかみたい」とつぶや
いた。

それ以来、風邪をひくたびに中山さんを思い出
す羽目になってしまった。そして熱が出るたび
に、冷えたご飯でお粥を作る儀式をしなければい
けなくなってしまう。そして今は、去年の秋か
ら一緒に住む夫のためにキッチンに立っている。
週明けには彼もきつと会社に出られるだろう。あ
の時のわたしが、そうだったように。

河島レイ

海外在住の根無し草。

文芸サークル「島田井書店」店主。

短歌同人誌 Cahiers (カイエ)、歌集「花と剣」、小説「化身の森」、写真集 "Walking in the Shade"

本作品「週明けに」は、"Companio vol.4" (カンパニオ 2017 年冬号)
に掲載された「コピ」のシリーズ作品です。以下のリンクより、無料
でお楽しみいただけます。

「コピ」作：河島レイ <http://p.booklog.jp/book/112426/read>

※この作品はフィクションです。

死と祝祭

豆太

お通夜ムードという言葉が暗いものだと知ったのは随分成長してからのことだった。なにせ、それまで私は齢九十を超えた曾祖父母のそれにしか参加したことがなかったのだ。

「この度はご愁傷様です」

ゴシューショーサマというのが「残念」みたいな意味だというのは私にもわかるが、格式張った挨拶というよりは一種のレトリックに聞こえる。

私がまだ小さい頃に亡くなったのは母方の曾祖母で、今回はとは反対側の、つまり母方ではなく父方の曾祖母が亡くなった。父方の親戚はやけに多い。

頭を下げた喪服の男性は、顔を上げるなり破顔して「お幾つでしたか」と父に訊く。父は「九十二だったか三だったか」と曖昧に答える。父は今日だけで五回以上この返答をしていて、本当の年齢の確認はしていない。

「それはめでたい。大往生ですね」

「いやよく生きましたよ。ついこの間まで元気だったと思ったらころっと」

父が身振り手振りで「ころっと」ひっくり返る真似をしてみせる。さすがに不謹慎ではと思ふものの、まあ、別にいいんだろう。今回の喪主である大叔父は朝から何かしら用件が立て込んでいるらしく、元来話好きの祖母と父とがいちいち話し込みながら弔問客に挨拶をしている。弔問客に知り合いがいるわけでなく、気の合う同世代がいるわけでもない私と弟と母は概ね「タイミングを伺ってお辞儀をする」マシーンと化している。見覚えのない親類縁者におがったなあおがったなあとしきりに声をかけられて私は曖昧に笑う。

頬に綿を詰められ、死に化粧をし、死に装束を着て棺に入った曾祖母は、まるで蠟人形のような姿をしていた。それが人であることは知っているし、声も笑顔も知っている。けれどそれがかつて動き笑っていた曾祖母と同一には見えなかった。今にも動き出しそうだとも思わなかった。どんなにリアルでも人形は動かない。

ひどく白々しい儀式めいたお葬式が終わると、弔問客一行は別室へ移る。そこにはテーブル

ルと椅子、料理とお酒が並んでいて、何と云うべきか知らないが、宴会場じみている。

上座の方で誰かが笑い声を立てる。そこかしこで沢山の人達が盃を手に曾祖母の思い出話に花を咲かせている。

曾祖母は手芸が好きな人だった。毛糸で座布団カバーを編み、要らなくなった布でパッチワークの鍋敷きを作り、綿入れを作り、部屋のそこかしこ手作りの人形を座らせていた。

これが「お通夜」でないことは、今はわかっている。これはお通夜のおまけだ。故人を偲び、故人を送り出す儀式としての食事会。銀鱈の横に添えてあるはじかみをかじる。

私は食べる。かつて命だったものの抜け殻を食べる。

そうして私は今日も、おそらくは明日も、生きている。

参加者一覧（掲載順）

篠田くらげ(@samayoikurage)

今回は苦戦しましたが頑張りました篠田です。久しぶりに短詩をやりました。小説飽きた……じゃなくて、新境地をひらけていればと思います！今回はお酒です。お酒好き。皆様も美味しいお酒を召し上がれますように。

原沙良葉(@harasarahaha)

食事に纏わることにたくさんの幸福も不幸もあれど、食べるという行為自体は、おおむね幸せなのだろうと思います。一人と二人と、思い出と未知と。たくさんのご飯を食べて、生きてゆけたらいいなと思います。

日魚ときお(@tokyosanfish)

パソコンが中途半端に壊れてしまったため仕方なくスマホでぼちぼち作りました。今回は市販のチアシードクッキーを食べて着想を得たのですが、あってもなくても良いような。味も栄養的にも胡麻って偉大だなと感じる今日この頃です。

古井久茂(@fulidom)

個人サークル fulidom 代表の古井久茂です。

我々はいつまで個人サークルでなければならぬのか毎夜毎夜枕を濡らしております。新規メンバー募集中です。

小説や短歌の依頼も受け付けています。あなたの依頼をお待ちしております。ページを開けばそこにいる、古井久茂でした。

巫夏希(@natsuki_miko)

一周年おめでとうございます。なんとか頑張って毎号美味しいご飯の話を出せることができてうれしいです。

次はどんな食べ物にしましょうか。……次までに何かストックしておきます。

河寫レイ(@ray_kwsn)

お粥大好き河寫レイです。凹んだ時、ホームシックにかかった時など、実は風邪をひいた時よりやけに食べたくなります。じゃあ誰かに作って欲しいのかというとそうでもなくて、実は自分で作ったお粥が一番おいしくて。なので誰かに作ってもらいたいわけではないのです。あ、話が終わっちゃいましたね。

豆崎豆太(@qwerty_misp)

お祝いつぽいものを書こうとしていたつもりがお祝いつてなんだっけみたいな作品になりました。カンパニオ一周年ありがとうございます。これからも随時ゲスト参加募集しております。ぜひご連絡ください。